

木賊刈

長唄 全詞章

変化舞踊「姿花秋七種」の一 能「木賊」に取材

資料の題名読み「とくさかり」

面白や梢はいづれ一葉ちる、嵐や音を残すらん

〔三下り〕 木賊刈る

其の原山の木の間より

磨かれ出る秋の月、露分け衣袖ぬれて、男鹿鳴く野の行末と、夫は信濃路我は又、老を養ふ
たの 楽しみに、心を磨く種にもと

いざや木賊を刈らうよ

今宵の月を友として、昔話の独り笑み

昔ぢいと婆とがあつたとき、爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に、互に跡を見送りて、山と
かは 河へぞ出らるる

婆は尾上を見やりつつ、北山おろしの烈しくて、嘸寒かろういとしやと我身より尚爺殿の、
み 身の上思ふ諸白髪、うち連れて急ぎ行く、おらが元氣はナア若い者にも

いつかないつかな

めつたにや負ぬ、九十九折なるゑりくりゑんじよの山路なりと

いつかないつかな滅多にや負ぬ、九十九折なるゑりくりゑんじよの山道なりと、足はしつかり
腰をそらして杖いらぬ、浮世語となりにけり